

校長先生の初恋物語

第36話 当たりが止まらない

「お兄ちゃん、大変大変。ひっこみやがすごいことになってるよ。」

とっくんの妹、エーコちゃんが息を切らして帰ってきました。とっくんは、いそいでひっこみやに行きました。

ひっこみやは、人だかりができていました。その真ん中に、きんに君がいました。きんに君は大きな声でさけんでいました。

「やったーっ。また当たっちゃっただちョーッ。もう一本アイスがもらえるだちョーッ。」

きんに君のあごには、セロハンテープでによろひげがついたままでした。そしてきんに君が食べていたアイスが、ホームランバーだったのです。きんに君は大喜びしながら、みんなに当たりのぼうをみせびらかし、お店の中にまた入っていきます。そして、新しいホームランバーを持ってまた外に出てきます。そこでホームランバーのつつみをとって、アイスを食べるきんに君を、みんなが取り囲み、アイスを食べ終わるのを待ちます。とっくんも、その輪の中に入って、きんに君がアイスを食べるのを見ていました。

「信じられない。きんに君、これで、ホームラン4本連続だぜ。」

「すごいねえ。そんな人見たことないよ。」

まわりの子供たちがもりあがる声を聞きました。

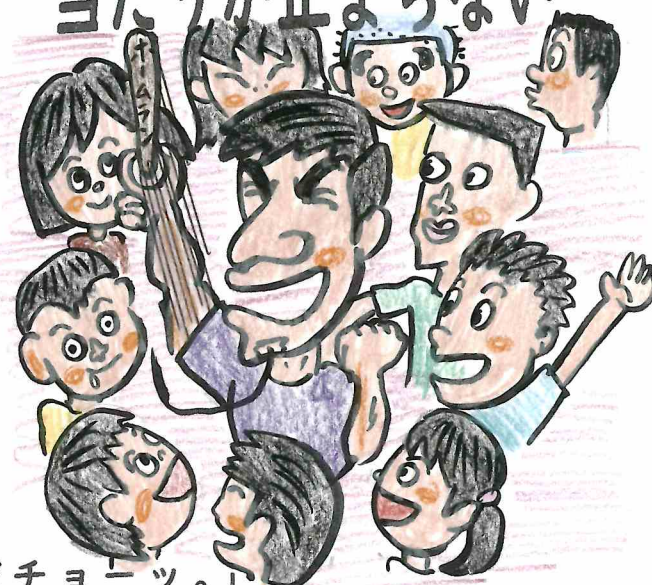
「ウヒョーッ。すごいだちョーッ。またもやあたりだちョーッ。」

きんに君は、5本目のホームランを出しました。ここまでホームランが続くと、お店の人もギブアップです。

「もう、かんべんしてよ。」

きんに君は、セロハンテープではってあったによろひげをはずしました。すると、ホームランは、ぴたっと止まりました。

きんに君のホームラン5連続の秘密を知っているのは、とっくんだけです。「本当に、あのによろひげには、すごい力があつたんだ。」



によろひげ先生、すごーなー。ぼくも、いつか、あのによろひげをかしてもらいたいなあ。」



翌日、5年2組は大さわぎになっていました。によろひげ先生の机の前には大行列ができていました。きんに君は、によろひげのことをだがしやさんでべらべらしゃべってしまったようです。そのきんに君の話を聞いて、によろひげめあての子供たちがさっとうしてしまいました。によろひげ先生は、困った顔をしていました。

によろひげ先生のあごに、によろひげはもどっていました。セロハンテープは見えませんが、何か、のりかボンドのようなものでくっつけたんだと思います。そのによろひげを1人ずつさわらせてもらっていました。

とっくんも、列の一番最後に並びました。そして、一番最後に、によろひげをさわりました。もう後ろはだれもいませんから、みんなよりも時間をかけてさわることができました。によろひげ先生が、「とっくんは、しつこいなあ。もうそれくらいでいいだろ。」といやがりましたが、によろひげをはなれませんでした。

そのしつこさがよかったんだと思います。とっくんには、この直後、信じられないような幸せが2つやってきたのです。その1つが、よしこさんの席のとなりをくじでひきあてたという、あのきせき。そうです。あのきせきのくじびきは、とっくんがによろひげ先生のによろひげをさわったあとの出来事だったんです。そしてもう1つは、よしこさんのとなりの席になったということよりも、もっともっとすばらしい幸せです。ホームランバーの幸せをはるかにこえるものです。足長君に知られたら、まちがいなく足長君がしっとして、あばれそうなことです。なんと、なんと、よしこさんが……。

つづく

次回予告 二人だけの秘密 ♥

